十　人生の壁？

　もう、ダメだ。直人はとうとう立ち止まった。三十キロを過ぎた地点だった。マラソンでよく言われる三十キロの壁だ。その兆候は二十キロを越えた時から既に始まっていた。股関節や膝が痛くなり始め、スタートしてから同じスピードで走っているはずなのに、息だけは荒くなってきていた。明らかに、十キロ地点での体の様子とは異なっている。練習では、一回だけ三十キロを試走してみた。その時も、二十キロまでは調子よく走れたものの、二十五キロを越え、残り五キロではほとんど歩いてしまった。こんなにしんどいのだったらもう二度と経験したくないという気持ちが先に立って、それ以来三十キロの練習はしなかった。今日は試合なので、気合が入り、体も緊張しているせいか、なんとか三十キロまではもった。だが、その分、反動が大きかった。三十キロを過ぎた途端、急に、足が重くなり、膝や股関節の痛みが激増した。嫌な予感が的中した。そう、的中するものなのだ。

　ガンバレ、ガンバレ。沿道からは盛大な声援が掛かる。前半の調子がいい時は、その声援は追い風になったが、足を一歩前に出す度に、体中に痛みが走る（そう、どうせ走るのなら痛みじゃなく、前に走って欲しい）状態では、痛みに耐えながら十分頑張っているのに、これ以上、何を頑張れと言うのか、という反発や怒りの気持ちが湧いてくる。そんなにガンバレと言うのなら、お前が走ってみろと、心やさしい応援者に対して逆ギレしそうになる。

　時計を見る。一キロ当たりのペースは六分近くまで落ちている。本来なら、サブスリーを目指していたのに、このペースではもう無理だ。前半は、五キロごとにしか腕時計を見なかったのに、今では、一キロ、いや五百メートルごとにタイムを見てしまうる。それだけ体も心も疲れているし、このたかだか一キロ、千メートル万里の長城のように長いのだ。長く感じるのだ。

　コースと時計を見るのを何回も繰り返し、誤魔化しながら、なんとか、三十五キロ地点までやっと辿り着いた。そう、走って来たというよりも辿り着いたという方が正しい。スポーツドリンクの摂り過ぎで、口の中や顔、漏れたスポーツドリンクが付着した手や腕はべたべただ。ハエ捕り紙じゃないけれど、走れば走るほど、顔に小虫が引っ着きそうだ。ゴールする前に、ハエ男に変身するかも知れない。笑えない状態なのに、こんなことを考える自分に笑ってしまう。

　三十五キロ地点のエイドステーションで立ち止まる。もはや、テレビで見るマラソン選手のように、颯爽とボトルを掴み、エイドステーションを走り抜ける姿ではない。エイドステーションでは直人と同じように他のマラソンランナーたちも足を引きずっている。

「どうぞ」「がんばってください」と水の入った紙コップが差し出される。こんな状況にありながらも、できるだけ可愛い女子高校生から水を受け取ろうとする直人。ありがとうの言葉も出ずに、口の中に水を流し込むとともに、もったいないとは思いながらも、ふくらはぎ、膝、ふともも、顔、首筋に水を掛ける。汗を流し、虫も流し、疲れも流し、気分転換を図ろうとする。

　一瞬、ほんの一瞬だが、生気が戻る。気合が入ってくる。だが、数歩走り出せば、すぐに、あちこちの筋肉が痛みを叫び出す。まるでゾンビ走りだ。それに、喉は渇いているが、お腹はジャブジャブだ。お腹だけが飛び出ている。こんなんじゃあ、まともに走れる訳がない。それでも、不安からか、水を再び飲みたくなる。もう、だめだ。三杯目の紙コップが空になった後、直人は

走ることを止め、歩き始めた。とにかく、後ろ向きに走らなければゴールできる。はずだ。
　しばらく歩いていると、見慣れたピンク色のランシャツ・ランパンが見えた。中山先輩だ。直人よりもかなり前を走っていた。はずだ。確か、五キロ地点からピンク色が見えなくなった。調子がいいんだ、中山先輩は。俺は俺のペースで走るんだ。そう思っていた。途中からは、脚の痛みなどで、中山先輩を始め、荒木先輩の事もすっかり忘れていた。既知との遭遇。二人にとって、あまりありがたくない遭遇だ。そのピンク色が沿道で、屈伸をしたり、アキレス腱やふくらはぎを伸ばしている。
「先輩、どうしたんですか？」直人は歩きながら後姿に声を掛けた。
「あら。直人君。足が吊っちゃってね。最初、右足が吊って、我慢して走っていたら、左足も吊っちゃったの」でも、中山先輩は体とは裏腹に、顔はひまわり笑顔、声はフランス人形？のままだ。
「両足ですか？大丈夫ですか？」直人も同じような状態にも関わらず、心配の声を上げる。
「やっぱり、三十五キロの壁かな」その時だけ、ひまわりの花が少し閉じ、フランスの人形が遠いフランスへ帰りたいような顔をした。
「そんなことないですよ。大丈夫ですよ。先輩なら完走できますよ。先輩には歌があるじゃないですか。歌が」まるで歌を歌うかのように直人は腹から声を出した。
「歌？」ひまわりの花が小首を傾けた。
「さんじゅうごきろ～ごおえ～」直人は、中山先輩の十八番、石川さゆりの天城越えのサビの部分を替え歌で歌った。いや、音程はないから歌じゃない。ただ単に、知っている歌詞を叫んだだけだ。
「それに、高校の時に荒木先輩から貰った天狗のお守りもあるじゃないですか？」と言いながら、自分のポケットをまさぐる直人。しまった。忘れた。バッグの中だ。お守りに守られていないから、こんな目に会うんだ。人を励ましながら、意気消沈する。
　その声を聞いて、閉じかけていたひまわりの花がぱっと開いた。花に歌という太陽の光が当たったのだ。また、天狗の後光も差したのかもしれない。
「そうね。三十五キロ越えね。お守りも持っているわ。忘れていたわ。元気をくれて、ありがとう。ゴールで会いましょう」
　中山先輩は大きく頷くと、首からぶら下げたお守りを強く握りしめ、さんじゅうごきろ～ごおえ～、さんじゅうろっきろ～ごおえ～と次々に歌いながら、これまで両足が吊り、立ち止まっていたのが嘘だったかのように、ゴールに向かって元気よく走っていった。
　まだ、あんなに力が残っていたんだ。後に残された直人は、ただ茫然とピンクのユニフォームの後姿を見送った。ただし、直人には、天狗と歌の御加護は訪れそうにはなかった。